リポジトリの視点

入江 伸*

慶應義塾大学メディアセンター本部

I. はじめに

2005年度から始まった国立情報学研究所（以下 NII）の進める「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業（Cyber Science Infrastructure）」は、全国大学での機関リポジトリの構築を推進している。慶應義塾大学メディアセンター（以下、慶應）においても、2005年度に事業を受託しリポジトリの構築を進め、その成果報告を NII のサイトで公開している¹⁾。また、慶應義塾大学メディアセンター機関誌『MediaNet』²⁾ No.13 (2006) において、90年代電子図書館からの流れとリポジトリの関係と課題についての考え方を説明した。本稿では、慶應における2005年度の CSI 事業への取り組み方と、今後の方向性について説明する。

II. 2005年度の慶應での取り組み

1. デジタル化計画

慶應義塾大学メディアセンターは、2005年中期に新しい図書館の機能として、貴重資料（研究対象となる資料）のデジタル化ラインの構築、学内における歴史的資料のデジタル化、学内出版物の電子化および、大学出版会と連携した電子出版体制の慶應モデルの開発、およびアカデミックコンテンツのデジタルアーカイブを構築することを掲げた。慶應におけるリポジトリ構築は、その計画に沿って進められている。

CSI 事業における各大学の取り組みにはリポジトリに対する多様な考え方が存在している。これは、各大学の置かれている状況の多様性を表しているといえるだろう。慶應の取り組みの1つの特徴は、大学における図書館の新しい役割として、学術出版のデジタル化を促進し、その網羅的な収集を行おうとしていることである。これによって、学内に研究・教育・社会貢献のための新しいスタイルのアーカイブを構築し、社会への情報発信を促

進することができると考えている。

2. 貴重書・貴重資料デジタル化の意味

人文社会科学系において、研究対象である貴重書等のデジタルデータを教育や研究で利用したいという要望が増えている。大学が所蔵する貴重な資料を可能な範囲で公開し、研究者の利用へ供することはこれからの大学の重要な使命でもある。このような資料のデジタル化は、研究成果だけではなく研究対象そのものをバーチャルな世界へ持ち込み、新しい教育・研究環境を作り出すための新しい試みとなりうる。慶應義塾大学デジタルアーカイブリサーチセンター（DARC）での貴重書高精細画像を活用した人文科学分野での試みはそのひとつの例である。

3. 学内成果の電子出版とアーカイブ

学術論文のデジタル化や公開・発信の状況は、分野や学会ごとに大きく異なっている。このような中で、大学全体としてデジタル化と公開・発信を推進していくことは非常に重要な課題である。学術コンテンツの流通における研究者・学会・出版社・図書館の役割の変化が起きている中では、まず大学における出版・流通の過程を改革することが必要である。

今回の慶應の CSI の取り組みにおいては、慶應義塾大学出版会と連携して印刷工程から全て電子化する標準的な仕組み作りと、図書館で資料を配架するように学術コンテンツをアーカイブしサービスするシステムの構築を行う。このアーカイブでは、紀要や学会誌、学術誌を含めたボーンデジタルの全ての学術資料が収録対象となる。

4. アカデミックコミュニティ

インターネット上に公開されたフローからアーカイブまでの学術コンテンツは、それを中核とした多様なコミュニティを作りだしている。このようなコミュニ

*Shin IRIE : 〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45.

irie@lib.keio.ac.jp

(2006年9月19日 受理)

ティーと図書館の連携がこれからの重要な課題である。また、図書館の所蔵するコンテンツを核としたコミュニティ作りの可能性も広がっている。

Google が Book Search でアーカイブした資料を中核として Explore Shakespeare with Google³⁾ を公開しているように、デジタルアーカイブを中核とした研究者や愛好家を含んだ新しいコミュニティの可能性が生まれている。流通革命とは、生産者と消費者の直結であるといえるが、学術コミュニティにおけるコンテンツの生産者と消費者はどちらも研究者である。このような特殊なコミュニティと商業出版社や図書館がどのような関係を作っていくのかを考える必要がある。

5. XoonIps⁴⁾の試み

理化学研究所ニューロインフォマティクスのグループは、新しいコミュニティへの試みを進めている。脳科学における国際的な研究グループを立ち上げ、その研究プラットフォームとして成果をアーカイブするためのシステムを作り、それを基盤として研究成果を発信している。このプラットフォームとして開発しているシステムが XoonIps である。XoonIps のシステム的な特徴には、XOOPS というコンテンツマネジメントシステム (CMS) という枠組みにアーカイブ機能を付与したこと、検索インターフェース以外にインデックスツリーをインターフェースとして用意しカテゴリーごとにブラウジング的なアクセスを可能としたことがあげられる。Google のキーワードによる検索によって XoonIps へ入り込んだ利用者が、分類やファセットなどによって組織化したインデックスをブラウジングすることによって探索を広げようとするものである。(個人的に Google から DB への J ターンと呼んでいる。)

Ⅲ. 情報環境と大学の変化

オープンアクセスで有名な Jan Velterop 氏は、「シュプリンガーセミナー 2006」での「Science Publishing in a Changing Environment」と題された講演で、インターネットの登場を、恐竜を絶滅させた大隕石に例えて、様々な新しい学術情報流通の動きは、この情報環境の変化へ対応するために起こっているものだとし、オープンアクセスの動きもこの変化へ対応するための新しい流通モデルであり、この変化に対応できない場合は、恐竜のように絶滅してしまうと述べていた。

このような環境変化に加えて、大学の社会的役割の変

化が、図書館におけるリポジトリの流れを加速している。大学の教育研究の成果を社会へ発信することは、大学の社会的な評価を上げ、結果として外部からの研究資金の獲得の可能性を高める。このため、研究者の業績データベースと学術コンテンツのアーカイブが連動し、大学の成果の可視性を高めることが求められているのである。

Ⅳ. おわりに

図書館は資料収集とサービスを集中的に管理することによって効率化を実現する情報仲介サービス業であった。しかし、インターネットの進化によって出版と流通が個人レベルのものとなり、情報流通が大きく変化の中で、その仲介業としての出版社や図書館の対応が迫られている。例えば、出版社から出版と流通機能が不要となり、企画・信頼性・宣伝の重要性が高まり、大学図書館において、出版モデルが変化する中で出版やデジタルアーカイブ機能が重要になるかもしれない。

公的資金による研究成果をオープンアクセスにする動きをはじめとして、投稿料を支払うことによって著者の著作権を留保するというオープンアクセス化、国内学会誌の海外の商業出版社による発行⁵⁾等、学術情報流通に関わる様々な動きが出ている。CSI による図書館の新たな活動によって、図書館員と研究者、学会、研究コミュニティ、出版社との垣根を低くし、そこから生まれる新しいコラボレーションが図書館の可能性を広げようとしている。図書館が今後も学術情報流通の一端を担い続けるために、リポジトリ構築を通して、学術コミュニティや出版者との新たな、また多様な関係を構築し、図書館の役割を果たしていくことが重要であると思う。

参考文献

- 1) 慶應義塾大学. 平成 17 年度委託業務成果報告書[internet]. <http://www.nii.ac.jp/irp/info/2005/final/keio.pdf> [accessed 2006-09-01]
- 2) 慶應義塾大学メディアセンター. MediaNet[internet]. <http://www.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/> [accessed 2006-09-01]
- 3) Explore Shakespeare with Google[internet]. <http://books.google.com/googlebooks/shakespeare/> [accessed 2006-09-01]
- 4) XoonIps officialsite[internet]. http://xoonips.sourceforge.jp/modules/xhnewbb/viewtopic.php?topic_id=46&forum=1&post_id=103 [accessed 2006-09-01]
XoonIps Library Module[internet]. <http://sourceforge.jp/projects/xoonips-library/> [accessed 2006-09-01]
- 5) 慶應義塾大学. シンポジウム「学術情報の蓄積と流通をめぐる視点」[internet]. http://www.lib.keio.ac.jp/csi/csi_seminar.html [accessed 2006-09-01]